



御食事処 つり吉

初夏の龍神村に、鮎の季節が訪れます。村を流れる日高川は、川底が見えるほど澄んだ清流。その豊かな自然に育まれた鮎は、爽やかな香りと上品な旨みをあわせ持ち、夏を代表する味覚として親しまれています。今回訪ねたのは、鮎料理を求めて多くの人が足を運ぶ「つり吉」。

日高川の恵みを受けた鮎のおいしさと、それを支えるこだわりについてお話を伺いました。



【香り高い龍神の鮎】

龍神の鮎の美味しさは、日高川の豊かな自然によって育まれています。川底が見えるほど澄んだ水と、鮎の餌となる良質な苔。鮎はその苔を食べて育つため、環境が味や香りに大きく影響します。ご主人によると、「日高川の鮎は香りが強く、内臓までおいしいのが特徴」とのこと。旬は5月上旬から10月下旬頃まで。初夏の若鮎は清々しい味わいを、秋の子持ち鮎はふっくらとした旨みを楽しめます。

その食べ方、もったいないかもしれません！

鮎の塩焼きは頭や背中から食べる人が多いですが、つり吉おすすめの食べ方は少し異なります。まず尾を軽くかじり、その後ゆっくりと頭を引っ張ると、骨がずりりと抜けて身だけが残ります。骨が抜けることで身を崩さず、より食べやすくなります。香り高い身をじっくり味わった後は、ほろ苦い内臓の旨みもぜひ楽しみください。



【一日水槽で泳がせ、砂や苦味を抜く】

つり吉では、冷凍の鮎は料理に使用しません。店主自らが釣り上げた鮎を一日ほど水槽で泳がせ、体内の砂や老廃物を丁寧に抜いてから調理します。こうすることで、にがみが抑えられ、内臓までおいしく食べられる鮎になるといいます。さらに焼き方にも工夫があります。一般的な炭火焼きではなく、「上天秤（うえてんびん）」でじっくりと加熱。下から火を当てると煙が鮎に付き、香りや味に悪影響が生じるためです。時間をかけて焼き上げられた鮎は、身はふっくらと仕上がりと、ヒレまで香ばしく味わえます。鮎本来の香りを大切にするためのこだわりが、一尾一尾に込められています。

【上火式グリラー】



ミニコラム① 龍神村は鮎釣りの里

龍神村は、鮎釣りの名所としても知られています。清流・日高川には毎年多くの釣り人が訪れ、その環境の良さは全国的にも高く評価されています。「一度に二匹掛かった時の快感は格別ですよ」と話すのは、オーナーカップ鮎2025決勝大会優勝者の林誠二さん。豊かな自然と清流に恵まれた龍神村は、鮎を味わうだけでなく、鮎釣りの魅力にも出会える場所です。

ミニコラム② 鮎はなぜ“香魚”と呼ばれるのか

鮎は川底の良質な苔を食べて育つ魚です。そのため身に爽やかな香りが生まれ、スイカやキュウリに例えられることから「香魚」と呼ばれています。清流・日高川で育つ鮎は特に香りがよく、龍神の夏を代表する味覚として親しまれています。

つり吉 店主ご夫妻より

龍神の鮎は、清流・日高川の恵みを受けて育った自慢の味です。香りが良く、内臓までおいしく食べられる鮎を味わっていただけるよう、鮮度や下処理にもこだわっています。初めての方も、毎年楽しみに訪れてくださる方も、ぜひ龍神ならではの鮎の味をお楽しみください。皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

※ 鮎は仕入れ状況によりご用意できない場合がございますので、事前にお電話でお問い合わせください。

釣り吉おやじのきままなブログ (Ameba ブログ)

龍神つり吉TV (YouTube)

店舗情報

田辺市龍神村廣井原1003-3

☎ 0739-79-0165

営 6:00~18:00 不定休(冬期は10:00~16:00)

ランチ/11:00~14:00

龍神マニアすぽっと ～安倍晴明伝説と猫又の滝～

田辺市龍神村殿原地区には、平安時代の陰陽師として名高い安倍晴明(あべのせいめい)にまつわる数多くの伝説が残されています。そのため、この地域は「晴明の里」と呼ばれ、今もなお語り継がれています。地区内には安倍晴明を祀る安倍晴明社をはじめ、晴明淵、晴明転がし、腰掛け石、晴明田など、晴明ゆかりの場所が点在しています。今回は、その中から「猫又(ねこまた)の滝」をご紹介します。

安倍晴明は平安時代中期に活躍した陰陽師で、陰陽五行思想に基づく天文学や暦学、占術、祈祷などに優れていました。その知識や計算能力はもちろん、不思議な力をもっていたと伝えられ、病を癒し、雨を降らせ、ときには怪異を鎮めるなど、その力は当時の天皇からも厚く信頼されていた大変な実力者でもありました。今からおよそ1,000余年前、晴明がなぜ龍神村を訪れたのかは分かっていません。修行のためだったのか、旅の途中だったのか、それとも困っている里人を助けるためだったのか。理由は定かではありませんが、現在も数多くの伝承やゆかりの地が残されており、殿原地区と安倍晴明との深い関わりを物語っています。

安倍晴明が生きていた時代、龍神村殿原地区の谷口という里にある山には妖怪がたびたび現れ、里人や旅人を惑わせ、危害を加えていました。また、山頂の馬場(馬の訓練道)では、誰も乗っていない白馬が駆け回り、夜になると「木偶(でく)茶屋」という舞台で人形芝居が行われるなど、不思議な現象が続いていたと伝えられています。そんな中、この地に晴明が訪れ困った里人に事情を聞くと、すぐさま山に登り妖怪退治の祈祷を始めたそうです。妖怪は抵抗し、大雨を降らせましたが、晴明は持っていた杖を柱に、「笠」を屋根に見立てて仮のお堂を作り、護摩(ごま)を焚きながら三日三晩祈祷を続けました。やがて晴明の強い精神力が勝ち、妖怪を現在の「猫又の滝」に追い詰めます。そして晴明は妖怪を封じ込め、滝の岩に梵字(ぼんじ)を刻み、「この字の消えぬうちは滝つぼから一歩も外に出ることを許さん」と宣言し山を下ったと伝えられています。

この伝説から笠塔山(かさとうやま)という地名が生まれたとされており、山頂には護摩壇の跡と馬場跡が今も残っているとされています。谷口の里へ下りた後も、晴明がさまざまな問題を解決したという伝説が数多く残されていますが、今回はここまでとさせていただきます。ご興味のある方はぜひ龍神村を訪れ、安倍晴明と殿原地区に残る伝説とロマンを感じながらゆかりの地を巡ってみてください。

猫又の滝へのアクセスは、龍神村西地区から殿原地区方向へ国道371号を約9km進み、晴明を祀った安倍晴明社のある龍神村殿原谷口方向(市道大網代谷口線)へ向かいます。賽ノ谷大橋から市道を約300m進むと、右手に「猫又の滝」の案内看板が見えてきます。滝は道路から直接見ることはできません。看板左手の広場に車を止め、谷沿いを上流に沿って80m程歩くと辿り着くことができ、両側が岩で挟まれた落差約10mの直瀑を目の前で見ることができます。

なお、「猫又」という名前は封じられた妖怪に由来するのではなく「猫もまたげる幅だったから」と伝えられています。妖怪伝説の舞台とは思えないほど澄んだ空気に包まれた場所で、訪れる人を癒してくれます。これからの季節におすすめの、知る人ぞ知る「まにあスポット」です。

以上、今回は安倍晴明伝説と猫又の滝のご紹介でした。